

ディネーターとの継続的かつ呼吸のあった連けいがあったこと、3)比較のためのアドホックな実証が東京大学を中心に精力的に進められたこと、などが挙げられよう。とくに最後の点については、この時点で、橋本・秋永両氏の報告の基礎になった調査報告の全貌が、藤田英典氏を中心にして公刊されたことを喜ぶたい。ご一読をお薦めする。「文化の階層性と文化的再生産」(『東京大学教育学部紀要』

第27巻, 1987年, pp.52~89) がそれであり、執筆者は藤田・宮島・秋永・橋本・志水宏吉の各氏である。さいごに、文化的再生産論の検討をさらに継続したいというのが関係者一同の感懐であったが、今後いっそうの批判的検討が加えられるならば、さらに稔り豊かな展望が獲得できるであろうことを期待したい。

(田原音和)

## ■ 課題研究報告 ■

# Ⅱ 都市空間と子ども

司 会 原 芳男 (東京工業大学)  
 報告者 平田道憲 (高岡短期大学)  
 梶島邦江 (早稲田大学大学院)  
 門脇厚司 (筑波大学)  
 討論者 池田 寛 (大阪大学)  
 亀田温子 (十文字学園短期大学)

魅力的なテーマであっても、まだ十分、手がつけられていない研究分野がある。62年度にはじめて課題研究としてとりあげられた「都市空間と子ども」もその一つである。

そうになっている理由には、いくつかのものがあげられよう。その一つは、やはり、「都市」の大きさ、複雑さ、変化の速さが未だに使いなれた、手頃な概念的枠組みや道具を十分に発達させていないことによると思う。「都市社会学」の講義はあっても、講義されている内容と都市の現実との間には、常に無視できない幅の溝があり、その間隔は近年に至っても縮まってはいない。一方、この都市社会学の「おくれ」に対して不満のある人たちは、都市社会の新しい変化を観察し、時には参加して、その経験をレポートする。このレポート記事は、たとえ興味深いものであっても、断片的、表面的で、研究者の研究心を満足させてくれるものではない。こうして都市の問題は、研究

者がうかつには手を出せない、それでいて関心の深い課題となっているのである。

第2に、このような状況のもとで、新しい研究(調査)方法への関心が高まってきた。K. Lynch の *Image of the City* (1960) は、都市景観と都市空間の研究に、画期的な影響を与えたが、その影響力は、この本で提供された諸概念だけでなく、方法の新しさもあったと思う。Lynch の影響は、さらに溯って、Koffka の “behavior environment”, Von Uexkull の “Umwelt”, また Lewin の “life space” のような“古典的”な諸概念の再発見と積極的な利用がみられるようになった。これらの変化は、建築学、景観工学、地理学などの理工系諸科学に顕著で、これらの研究分野が急速に社会科学に接近してきたのである。(たとえば、地理学出身の Roger Hart の *Children's Experience of Place* (1979)) 「都市空間と子ども」というテーマが、

教育社会学会の課題研究として設定された背景は以上のような現状と学際的な研究動向に触発されたものとする。

平田氏は「高層集合住宅における子どもの生活」について発表した。

この研究は1977～78年にかけて、横浜市と川崎市の高層住宅団地、3地点で母親とその子ども（1.5歳から小学校未満までの幼児）を対象とした生活時間調査の結果にもとづいている。

まず、子どもの1日の平均外遊び時間が高層居住の子どもの方が低層の子どもよりも短い（15分）ことを明らかにした。また、子どもが1人で外出できる能力を獲得する時期に高低差（低層で3歳まで、高層で4歳までに80%が獲得）があり、母親からの自立能力の獲得時期についても高低差（低層3.2歳、高層3.7歳で80%が獲得）があることを指摘した。さらに、遊び場の安全性に対する不安が母親の関心になっており、安全な空間が高層住宅内に用意されることの重要性を指摘したが、他方では、このような空間（例えば住棟内の遊び場）が実際には子どもたちによって利用されない傾向があることを示して、居住環境の中に子どもにとって、意味のある（meaningful）な空間を作り出すことが重要な課題であると提起した。

梶島氏は、建築学を専攻としているが、「子どもの眼に写る都市——イメージ・マップにみる地域イメージ——」について報告した。

この研究は、東京都江東区の小学6年生を対象としたイメージ・マップ調査と新潟県塩沢町での同様の調査との比較研究となっている。その結果、都市の子どもは、イメージ領域の広がり狭さが狭く、それは、子どもの経験、行動範囲の狭さを示す。しかしイメージ・エレメントの数は両地域で似通っており、領域の狭さを考えると、イメージ密度は濃いと言える。その他、都市の子どもに特徴的なこ

ととして、高層住宅の上から見たままのバード・アイによる地域イメージがみられる。また都市の子どもの描くイメージ・マップでは、イメージ相互の共有性が少なく、分断されたままになっているが、これは、子どもの地域イメージに統合性を与える小学校の認識度が低いと指摘している。さらに、都市の子どもは、自然物に対する認識が田舎の子どもよりも高いが、これは、都市に多い無機物が背景化（グルント）し、希少な自然環境が図（フィグール）として浮き出た結果ではないかと指摘した。

門脇氏は「都市の風景とヤングの心象風景」について報告した。

この報告は二つの点で野心的なものであった。第1に、しばしば断定的・否定的に語られやすい現代のヤング（子どもと若者）を、かれらの生活空間である都市の風景の中で、その心象風景を直接的に解読しようとするものであり、第2に、そのための方法として、文字や数字ではなく、映像そのものを記号論的に解読しようとするものである。発表は、報告者自身が撮影した東京やニューヨークの都市空間、ヤングに好まれている映画や劇画のシーンのスライド化したものを多数映写するという斬新な発表手法によって行われた。

このことによって門脇氏は、「都市砂漠」とも言われる今日の都市空間も、ヤングにとっては、それが身近なものであるかぎり、より親しみやすいものであり、自然物のリアリティーよりも、人工物のリアリティーの方が受け入れやすいものになっているのではないかと示唆した。

以上3人の報告は、それぞれ、幼児を対象とする生活時間調査、イメージ・マップ調査、文字や数字でなく映像そのものをデータとする発表など、それぞれ特色のある調査方法を駆使した新鮮な報告となった。

これらの報告に対して、池田、亀田両氏から報告者の1人1人に対して丁寧な